

2020. 9. 13 (日) マタイ22:23～33

22:23 その日、復活はないと言っているサドカイ人たちが、イエスのところに来て質問した。

22:24 「先生。モーセは、『もしある人が、子がないままで死んだなら、その弟は兄の妻と結婚して、兄のために子孫を起こさなければならない』と言いました。

22:25 ところで、私たちの間に七人の兄弟がいました。長男は結婚しましたが死にました。子がいなかったので、その妻を弟に残しました。

22:26 次男も三男も、そして七人までも同じようになりました。

22:27 そして最後に、その妻も死にました。

22:28 では復活の際、彼女は七人のうちのだれの妻になるのでしょうか。彼らはみな、彼女を妻にしたのですが。」

22:29 イエスは彼らに答えられた。「あなたがたは聖書も神の力も知らないので、思い違いをしています。

22:30 復活の時には人はめとることも嫁ぐこともなく、天の御使いたちのようです。

22:31 死人の復活については、神があなたがたにこう語られたのを読んだことがないのですか。

22:32 『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。』神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神です。」

22:33 群衆はこれを聞いて、イエスの教えに驚嘆した。

<説教>

イエスをことばの罠にかけてローマの権威に引き渡そうという企みに失敗したパリサイ人たち（このときはその弟子たちでした）は（ヘロデ党の者たち共々）イエスのもとを立ち去りました。

それと入れ替わるように今度はサドカイ人たちがイエスのところに来ました。

22:23 その日、復活はないと言っているサドカイ人たちが、イエスのところに来て質問した。

以前にサドカイ人たちとパリサイ人たちがイエスを試そうと共謀して、天からのしるしをイエスに求めたことがありました（16章）。

しかし、今度はサドカイ人たちだけで来て、パリサイ人たちとは宗教的に意見の異なる問題でイエスに質問をしました。

パリサイ人たちとは違い、「復活はない」というのがサドカイ人たちの意見でした。

「サドカイ人は復活も御使いも霊もないと言い、パリサイ人はいずれも認めてい」（使徒23:8）ました。

それゆえ、サドカイ人たちの関心は、もっぱらこの世の命のことでした。

彼らはエルサレムの神殿祭司の系列で、上流階級であり、同時にユダヤ人の最高議会（サンヘドリン）、大祭司を通じて支配者ローマ帝国と繋がっていました。

ローマ帝国の権力を背景にしてユダヤ人に権力を振るったヘロデ大王やその子「領主ヘロデ」(14:1)、それに繋がる人々とも繋がっていました(その点ではヘロデ党とも繋がっていたかもしれません)。

そんなことから、彼らの関心は死後のことではなく、今、生きているこの世でいかにその時々状況に上手に対応して生き残って行くか、利益を得るか、一旦得た利益や高い身分や富を守って行くか、ということでした。

そしてユダヤ教の宗教家としては、サドカイ人たちはモーセ五書(創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記)を特に重んじており、モーセ五書に直接書かれた律法(だけ)を最終権威としていました。

一方、パリサイ人たちはモーセ五書だけでなく、後の預言書やその他の書も重んじていました。

また更にそれらに様々な解釈を施して「長老たちの言い伝え」(15:2)、「自分たちの言い伝え」(15:6)なるものまで生み出し、大事にしていました。

そんなパリサイ人たちからすればイエスは律法や自分たちの言い伝えを守らない者、神を冒瀆する者でした。

しかしサドカイ人たちからすればイエスの教えはパリサイ人たちの教えと表面的には同じように見えたようです。

だからイエスも復活を認めていると考えたのでしょう。

それでイエスのことを、全く現実的でない、浮世離れた愚かな者だとサドカイ人たちは考えていたのです。

だからサドカイ人たちも、イエスを神の子、キリストと信じてイエスに従って行こうなどとは決して考えませんでした(その結論ではパリサイ人たちと同じでした)。

そんなサドカイ人たちが、イエスが神の子キリストどころではなく、いかに愚かで、(彼らの言うところの)聖書の教えもわかってはいないかということ「群衆」(33)の面前で暴いてやろうと考えたのです。

そこで、彼らが権威とするモーセの律法の一つ(申命記 25:5-6)を持ち出して来ました。

22:24 「先生。モーセは、『もしある人が、子がないままで死んだなら、その弟は兄の妻と結婚して、兄のために子孫を起さなければならない』と言いました。

22:25 ところで、私たちの間に七人の兄弟がいました。長男は結婚しましたが死にました。子がいなかったので、その妻を弟に残しました。

22:26 次男も三男も、そして七人までも同じようになりました。

22:27 そして最後に、その妻も死にました。

22:28 では復活の際、彼女は七人のうちのだれの妻になるのでしょうか。彼らはみな、彼女を妻にしたのですが。」

もし復活があるとしたら、私たちがモーセの律法にきちんと従った場合、「復活の際」にこんな面倒なことになる可能性があります。ではモーセの律法の方がおかしいとでも言うのでしょうか。そんなことはないでしょう。となると、やはり復活などあり得ないではありませんか。

サドカイ人たちはこんなふうに（勝ち誇ったように）言いたかったのでしょう。

このように彼らはモーセの律法を盾にとって、やはり鼻息も荒くイエスを問い詰めたのです。

しかしイエスは先の“税金問題”のときと同じように、敵対者の“愚問”にあっさりとお答えになりました。

22:29 イエスは彼らに答えられた。「あなたがたは聖書も神の力も知らないのに、思い違いをしています。

22:30 復活の時には人はめとることも嫁ぐこともなく、天の御使いたちのようです。

あなたがたこそ「**聖書も神の力も知らない**」で「**思い違いをしています**」る愚か者だとイエスは言われます。

あなたがたはモーセの律法（聖書）をねたにして「長男が死に、次男も死に、三男も死に、七人目までも次々と死んだ。最後に妻も死んだ。さあでは後々どうなるか」などという話しを作り出すが、それは自分の勝手な考えを正当化するために「聖書」を利用・乱用しているだけではないか。また「聖書」はモーセ五書だけではない。ヨブ記を見よ。詩篇を見よ。イザヤ書を見よ。エゼキエル書を見よ。ダニエル書を見よ。その中には死者の復活のことが書かれているではないか。そうやって聖書全体を知らなければだめだ。そうやって聖書全体から「神の力」を知らなければだめだ。そうしていないから「思い違いをしている（直訳：惑わされている－悪魔にということでしょう－）」のだ。

そんなふうにイエスは言うておられるようです。

また、あなたがたは「長男が死に、次男も死に、三男も死に、七人目までも次々と死んだ。最後に妻も死んだ。」などと言うことで、実はあなたがた人間は必ず死ぬことを認めているのであり、そんな死の現実に打ちのめされていると言うほかない。なるほどあなたがたがこの世限りの命にこだわり、この世限りの身分や富や利益にこだわるわけだ。しかしあなたがたは知らない（それゆえ信じもしない）が、神には死に打ち勝つ力があり、死んだ者を復活させる力がある。それゆえ「**復活の時**」は確かにあるのだ。

そうイエスは断言なさったのです。

また、結婚という制度は、復活の前のこと、つまりこの地上で生きている間、一度死ぬまでの間限りのこととして神がお定めになったことなのだ。そして「**復活の時**」すなわち霊と不死のからだ再び結ばれる時には、からだを持ちながらももはや結婚も、それに伴う出産も、それに伴う死もない「天の御使いたちのよう」な者に変えられるのだ。天の御国ではもはや人間の助け手は必要ない（文字通り完全な仲保者イエス・キリストのおかげで）。そこでは「天の御使いたちのよう」に、ひたすら神を仰ぎ、神を賛美し、喜んで神のみこころを行うことしかできないのだ。だからこの人は誰の妻だ？俺のものだ、いやちがう俺のものだなどという問題（争い）の起こる余地など全くない。あなたがたの思い違いも甚だしい。

そのようにもイエスは断言なさったのです。

そう考えると分かるように、イエスはここでは永遠の滅びに入れられるために復活させられる人々のことではなく、神を信じ、また今や地上に来られたイエス・キリストを信じ

て死に、キリストにある永遠の命をいただいて復活させられて生きる幸いな「**死人の復活**」のことを言っておられることがわかります。

ルカ 20:34-36 では同じ場面でイエスが言われたことが次のように書かれています。「この世の子らは、めとったり嫁いだりするが、次の世に入るのにふさわしく、死んだ者の中から復活するのにふさわしいと認められた人たちは、めとることも嫁ぐこともありません。彼らが死ぬことは、もうあり得ないからです。彼らは御使いのようであり、復活の子として神の子なのです。」

そんな「復活の子として神の子」なる「死人の復活」の事実は、なんとあなたがたサドカイ人たちが唯一の権威としているモーセ五書を通して神があなたがたにお語りになっているのではないか。それをあなたがたは読んだことがないのか。一体どうしたことか。

そうイエスは言われます。

22:31 死人の復活については、神があなたがたにこう語られたのを読んだことがないのですか。

22:32 『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。』神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神です。」

22:33 群衆はこれを聞いて、イエスの教えに驚嘆した。

『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。』とは、出エジプト記 3:6 に記されている、神が出エジプトのためにモーセをお召しになったときのみことばです。

これは、直接はモーセにとっては、わたしは昔はあなたの父祖アブラハムの神であった。また同じくイサクの神であった。また同じくヤコブの神であった。そのわたしが今度はあなたの神として今現れている。だから「わたしが、あなたとともにいる。」(3:12)だから恐れるなという力強い保証と励ましとして理解されたみことばでした。

しかしイエスはここで「**神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神です。**」と言うことによって、新たな、そして正しい意味を明らかにさせたのです。

すなわち、アブラハム、イサク、ヤコブはモーセの時代にも生きていたということです。

たとえ彼らが既にモーセの目には見えず、その遺体・骨は土のちりに帰っていたとしても、です。

死に打ち勝ち、死を乗り越えられる神の力によって、神のもとで、神の御前で彼らは生きていたと言われたのです。

ということは彼らはそのとき（サドカイ人たちがイエスに質問したとき）も神の力によって生きているのだとイエスは言われたのです。

聖書が「真の神はいるかいらないか」などと論じることなく、初めから神の存在とみわぎを語っているように、イエスは「死人の復活はあるかないか」などと論じることなく、始めから「死人の復活」を事実、真理としてお話になりました。

それはその後すぐにその週のうちになされるご自分の十字架の死と三日後の復活のゆえでもありました。

「**生きている者**」とは自分の生命力で生きているのではなく、命の源であられ、イエス・キリストを復活させた神の力によって生かされている者なのです。

「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神です。」と言われたときの「生きている者」とはイエス・キリストご自身のことでもあります。

私たちの罪のために十字架で死なれ、三日目に神の力によって復活させられたイエス・キリストこそ私たちの筆頭者なのです。

私たちもこの神の力によって死の現実を乗り越え、「死んだ者」から「生きている者」にさせていただけるのです。

私たちが信じ、自分の命をお任せするべきお方は、このイエス・キリストを死人の中から復活させなされた神、イエス・キリストの父なる神です。

またその父なる神に全く従順に十字架の死にまでお従いになり、復活させられなされたイエス・キリストです。

「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じるものは死んでも生きるのです。」(ヨハネ 11:25)と言われたイエス・キリストなのです。